

草創期学部小史と田中忠道先生のこと

スポーツ科学部教授 山本 勝昭

～田中忠道先生のこと～

ここでは、親しみを込めて「忠さん」と呼ばせてもらう。

忠さんとは四十数年間、同じ学部で仕事をしてきたが専門も研究室も違うし、教授会の座席も隣りになったことも無いので、話す機会は少なかった。その頃の学部の体親会の旅行（1年に1回）、例えば1987年には私が幹事で、ソウルオリンピック前年に学部教職員奥様も同伴でソウルでの他大学（ケイキ大）との交流、オリンピック施設の見学、学部内交流をかねて1泊2日のスケジュールで体親会始めての外国旅行。他スキーやスケート実習、歓迎会、送別会などの機会に言葉を交わすことが多かった。これら数少ない会話の中でいくつか思い出に残っていることがある。ご存知、忠さんはレスリングの世界チャンピオンである。また、シニアのチャンピオンのタイトルも取っている。いくら好きだといっても、80歳でのエベレスト登頂世界一の三浦雄一郎さんのように、本人の才能と努力があり、まわりのサポートがないと世界一になれるものではない。その点、家庭に恵まれ、おごることも無く、謙虚で親しまれた尊敬すべき人物であった。彼の生前に、お祝いなどの席で披露したかった私の知っているエピソードが3つある。

○ エピソード その1. 減量時の工夫と知恵

レスリングの選手は平常時の体重より少ない階級で競技を行う（柔道、ボクシング競技など）。その方が有利だからであるが、その分厳しい減量と対峙しなければならない。試合前2～3週間で6～10kg減など、日本レスリング全盛期のころ八田イズムでは試合前は徹夜で2～3kg減は、あたり前のことであつたらしい。この様に忠さんも競技前まであたりまえのように計量日までの減量に苦しんでいた。水もとれない、食物もとれない日が一週間近く続くことを考えれば仙人の心境であろう。凡人にはできない。彼は、この苦しみの中で見出したことがある。「キャベツ」をかじることだ！この野菜は水分は少なめ、新鮮なものは甘い、かじることによって食欲を幾分充足させることができ、トレーニング、サウナで汗をかき、体内の水分量を減ずるやり方で心身のコンディション作りをし、理想的減量を成し遂げて、実力を発揮することが可能となった。

○ エピソード その2.

一般・学部のスキー特別実習は、鳥取の大山スキー場で実施されていた。4泊5日の前段・後段の10日間の日程である。入れ替え日（休養日）は皆生（かいけ）温泉で疲れた筋肉を休ませ、松葉がにを食べ、英気を養い、後段のスキー実習に臨んだことが思い出される。若手の先生はDSK（大学スキー研修会）で研修に行き、研修を受けていない先生方に伝達指導講習を1日早めにゲレンデで実施していた。忠さんもその頃スタッフとして参加されていた。本部で打ち合わせのとき、いつ

も居ないのが忠さんだった。彼は筋肉を鍛えているので、しなやかでしかも強いスキーでデモを行い指導していた。宿舎に帰ると体調を悪くし、便秘などで寝込んでいた。強者も室温と外温の差への身体適応が充分機能しなかったせい、寒冷・温度差・ストレスが原因と考えられる。忠さんは、いつも指導責任を果たしたあとうんうんいいながら寝込んでいた。思えば、室内競技への適応能は優れていたが、野外での寒さの中でのスポーツへの適応は、温かい九州育ちとしては順応が弱かったのかもしれない。今、思えばそうだったのかと思いだされる。学部のスキー実習史として10年に1回、大山の上の原や中の原ゲレンデはポカポカ陽気で雪が解け、ゲレンデの頂上近くまで雪はなく、たんぽぽの花が咲いていた。スキー実習どころでなくハイキング実習の様相を呈していた。しかたなくマイクロバスでピストン輸送し、残雪のある元谷で実習をしたことが思い出される。その後、常雪を求め、新潟妙高高原、白馬スキー場、そして山形蔵王と実習地が変わって今日に至っている。

そのころになると、忠さんは指導スタッフを自から降りていった。その代りその後、野外でもキャンプ実習の主任として活躍されてきた。草創期の頃、私も含め先生方は4つの実習がノルマの中に入っていた。夏は遠泳、秋はゴルフ、冬はスキー・スケートと若かったから出来たかもしれない。スタッフが多くなり学生は選択制となり、今は先生方の負担を軽減するため、2つの特別実習を担当するようになったが、、、。

○ エピソード その3. 海外での奇遇な出会い

日本体育協会のスポーツ科学研究心理班「冬季種目のメンタル・マネジメント」調査でカルガリ(カナダ)に派遣(10日間)されたとき、冬季オリンピック大会の1年前であったエドモント大学、カルガリ大学内にあるスピードスケートリンク施設、そしてアルバータ大学のスポーツ医科学研究棟の見学とカナダオリンピック委員会における冬季種目のメンタル面の強化対策などが調査内容であった。アルバータ大学体育館に掲示されていた多数の大型パネルの中に、田中忠道選手が決勝でフォールしている写真を見つけた。職場の友と極寒のカナダアルバータ大学で出会うとは、思わず「ニコリ」嬉しかったことが思い出される。

3つのエピソードに学部史スケッチを織り交ぜながら描いてみた。共に学部を築き上げ、強い男で人にやさしく、家族思いの寡黙な忠さんとの予期しない別れは誠に残念ではあるが、心より悼みたい。

さて、学部の草創期のころから、今日に至るまでの学部史の原稿の依頼が編集長の桧垣先生よりあったが、特に役割分担する訳でもなく、それぞれが(山本、田口、遠藤)、自由に書くことになっているようだ。本稿は、田中忠道先生の追悼記が中心であり、その中で我々が20代、30代のころ1971～1981の10年間の学部の風景を私の記憶遺産として少し言葉で描いてみた。その頃は教務の仕事、バレーボール男子コーチ、女子監督、研究、学会発表、授業などノルマも多く、ノルマ

以外の仕事も多く、私にとっては疾風怒涛の時代でもあった。卒業要件としての124単位のうち4単位の体育は必須科目の時代であり、冬は週3回の天神スポーツセンター（今のソラリアホテル）での一般学生への集中スケート指導（早朝5時半起床）、その後、学部生への集中スケート実習、一般学生の約10,000人（1・2年生）のスケートの出席、前・後段の評価、転記などなどの教務の仕事は助手2名と私でこなしていた。これらの仕事を締切に間に合わせるため、午前1時、2時まではざらで一週間ぐらいかかっていた。また、赴任2年目には第23回日本体育学会の企画委員をまかされ、随分と苦勞したことがなつかしく思い出される。遠泳実習のときも何やかやと、12時過ぎまで大学との電話対応、指示連絡、処理判断などで多忙だったことが思い出される（詳しくは田口先生記）。

他に今と違ったところを書いておく。

○ 学部新入生研修会（英彦山1泊2日）

○ 学部祭（土・日）の2日間の大会

1日目 競泳、水球などのプールでの各学年教員対抗競技会

2日目 第1、第2体育館でのバスケ、バレー、陸上グラウンド周辺での駅伝、綱引き、腕相撲など

学生チーム、若手教員チームも参加し優勝か準優勝で学生には負けてはいなかった。

活気溢れる学部時代であった。紙数が足りないので4期に分けた学部の小史については、要望があれば次の機会に譲ることとする。